

Title	エッセイ : 未来共生プログラムを振り返って
Author(s)	平尾, 一朗
Citation	未来共生学. 6 P.146-P.148
Issue Date	2019-03-15
Text Version	publisher
URL	https://doi.org/10.18910/72122
DOI	10.18910/72122
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/>

エッセイ

未来共生プログラムを振り返って

平尾 一郎

大阪大学未来共生プログラム特任助教

筆者が未来共生プログラムに所属して5年以上が経過した。さまざまな活動が思い出されるが、とくに(1) 気仙沼フィールドワーク、(2) 同プログラムの評価・広報活動、(3) 未来共生調査法(量的方法)の授業について振り返りたい。

(1) 気仙沼フィールドワーク: 同プログラムでは毎年8月に東日本大震災の被災地で履修生のフィールドワーク研修が行われる。2016年までは3地域に分かれて活動が行われていたが、その際、筆者は宮城県気仙沼市を中心にフィールドワークを行う気仙沼班に所属し、稲場圭信先生の指導における補佐的な役割を吉田康寿先生、今井貴代子先生とともに担当した。たとえば現地でインタビューとなってくださる方々との日時調整、移動経路や宿泊施設の調整を行った。例年6月にフィールドワークへの協力のお礼、11月にそのお礼で気仙沼に出向いた。お礼で出向いた際に、履修生の執筆した報告書をお世話になった方々に持参した。皆様からは「自分たちは震災後の日々の生活で復興の様子を記録に残す余裕がない。このような形で残してくれることは非常にありがたい」、「毎年続けて来てくれる人たちは少ないから非常に嬉しい」、「こうやって毎年来てくれるところらもありがたく思う」といった有り難いお言葉を頂いた。気仙沼の皆様からいただく温かい言葉にはいつも嬉しく感じた。

(2) 同プログラムの評価・広報活動: 2013年1月に筆者は任用され

たため、2012年度の同プログラムの立ち上げの途中から関わり始めたことになる。筆者の任用時に当時のプログラム責任者の星野俊也先生が「これほどの大きな事業は私の研究者人生でも初めて」とおっしゃっていた。またプログラム・コーディネーターの志水宏吉先生、平沢安政先生のお話からも高揚感がひしひしと伝わってきた。大きなプロジェクトに関わることができて有り難いことだと思った。実際に仕事が始まると、新年度を迎えるまでは大変忙しく、教職員問わずカオスの中で仕事をしているような感じであった。職場に1人や2人くらい仕事の流れを把握している人がいてもよさそうだが、誰も何も把握していない仕事が多かった。たとえば筆者がしたわけではないが、住所の決定、domainの決定といった業務もあった。最初はプログラム・オフィスの住所も決まっていなかったし、respect.osaka-u.ac.jpのドメイン名もなかった。筆者は必要な物品の発注を行った。フィールドワーカーでない筆者にとって「取材セット」(ICレコーダー、ビデオカメラ、カメラ)という業界用語は聞き慣れない言葉であった。それらを履修生の分、業者の方に発注した。発注だけで済めばいいが、納品後の管理という業務も発生する。新品の商品を開封するという本来ならば嬉しい作業もやっかいな作業だった。募集要項の作成・送付という作業も行った。1週間ほど大学院の合格者に送付する募集要項の封詰め・ラベル貼りを院生アルバイトの方と一緒にした。発注業務、募集要項作成業務のように、初年度は仕事のロジスティックが出来上がっていないために生じる仕事が多かった。次年度以降はそれが出来上がっていったために大幅に省力化された。しかしロジスティックが未完成であったことが逆に活気をもたらしていたのかもしれない。大学というよりもむしろ中小企業的なまとまりのよさを感じる機会が多かった。立ち上げ期は上記のような事務業務が多かったため、広報的な仕事を徐々にできるようになったのは秋口になってからであった。秋口になり広報動画の作成に携わった。動画の構成はプロの業者の方にして頂いたが、筆者も同プログラムのまとまりのよさを伝わりやすくするように頑張った。

当時のプログラム関係の教職員・履修生の顔写真を全て集め、動画の最後のコラージュに使ってもらった。

(3) 未来共生調査法（量的方法）の授業：授業内容は社会学の初歩的な統計を用いた社会調査と分析手法の紹介である。特に苦心したのは、質的方法（フィールドワーク）と量的方法のバランスである。社会調査の文脈では質的方法は仮説探索的な方法、量的方法は仮説検証的な方法と言われるが（佐藤 2002）、個人に求められる能力もかなり異なるように思われる。端的に言えば、前者ではフィールドで臨機応変に対応できる能力、後者では物事を順序立てて進める能力が求められるように思われる。真逆であるとはまでは言えないが、それぞれを純粹にすれば異なる能力の獲得につながるはずである。筆者は後者の方で物事を順序立てて進めることに慣れている。できればそちらの方をもっと紹介したいという気持ちもあったが、あまりに紹介しすぎると履修生のフィールドワーカーとしての伸びを阻害しかねないように感じた。そのため量的方法の紹介においては、質的方法を補完するような方法の紹介にとどめた。

参考文献

佐藤郁哉

2002 『フィールドワークの技法——問いを育てる、仮説をきたえる』新曜社。